

カリムとファリファ

二〇〇六年一月、慎太郎はリヤドで二度目の正月を迎えた。

イスラム暦の一年間は一日だけ西暦より短いのでイスラム暦と西暦の最も重要な月が一緒になることは滅多にない。それが、二〇〇六年一月一日はたまたまズルヒツジャ（巡礼）月の一日と重なった。

ただ、モスレムにとって巡礼月の一日はあまり意味のあるものではない。大巡礼は一月八日から、イード・ル・アドハ（犠牲祭）も一〇日からお祝い気分にはまだ少し早かった。

従って、慎太郎にとってはやはり寂しい年末年始だった。

それに、今年は、昨年新年の挨拶をしてくれたイブラヒムもいない。

植木は、当初、四月の第一〇回国際石油・ガスフォーラムに備えてリヤドに止（とど）まると言っていたが、結局最後は思った通りに話が進まないと嘯（うそぶ）いて帰国してしま

った。植木は相変わらず次回第一〇回国際石油・ガスフォーラムで高原油価格問題を取り上げるよう懸命に進言していたのだが、理事会幹部は相変わらず聞く耳を持たなかったとのことだった。植木は慎太郎にそうばやくとがっくりと肩を落としていた。

慎太郎は、今年も逆瀬川の実家に電話を入れて正月気分を味わった。ただ、今年は、両親ともに涙ぐんでもうそろそろ帰って来いと訴えていた。慎太郎は、親不孝をしたとしみじみ思った。未だに結婚もしないで特命のために日本から遙か離れたサウジで生活している。使命感に燃えている時は良いが、ふつと空しくなる時もあった。特に、昨年十一月以来のプロジェクトの縮小、後退を考えると余計空しくなった。途端に、この二年間の努力が実り薄いもののように思えて来て仕方が無かった。

慎太郎はこれではいけないと心を引き締めた。寂しさを耐えてくれた両親のためにもあと一（ひと）踏ん張りしなければならぬ。

プロジェクトKについてはアリ石油相の見直し依頼を受けて東京の石渡、アルコパール支店の南、石油省、サウジアラムコの関係者などと再調整をしてきたが、思ったより時間が掛かっていた。それにはサウジ側特にアリの熱意低下が大きく影響を与えていた。何事もトップ次第のこの国では、そんなものであることを慎太郎は充分に分かっていた。

他方、年末年始は日本側が迅速に動ける状況には無かった。スルタンともしばらく会っていなかった。

慎太郎は、新しく聞いたスルトンの携帯電話番号に電話を入れてみた。すると、懐かしい声が聞こえてきた。慎太郎は、声を弾ませて話し掛けたが、スルトンの声には、いつもの元気が感じられなかった。その低音が一段と沈んでいるように聞こえた。

「シントロウ。電話を有難う。久し振りだね。元気そうだなによりだ。そうそう、君達は新年の挨拶をするんだったね。新年明けましておめでとう。日本に戻らなかったのかい」

慎太郎の方はプロジェクトKの見直して忙しくてあつと言つ間に時が過ぎてしまっていた。

スルタンは王位継承問題の前までは頻繁に慎太郎のところを訪れていたのに問題が出た後は訪れなくなっていた。

「スルタン、有難う。明けましておめでとつ。それから、ほんのちょっと早めだが、イード・ムバラク」

スルタンは慎太郎からイードを祝われて少し元気を取り戻したようだった。

「シンタロウ、ちつとも早くないよ。イードは一〇日頃から始まる予定だけど、今年は、特に皆、早めに言い合っているから・・・イード・ムバラク」、

「ところで、急だけど、今日、レジデンスを訪ねて良いかい」
スルタンは、だんだんと元のスルタンに戻っていった。

「もちろん。今日は会社も休みだし、いつでも良いよ」

慎太郎は、スルタンが急の好きな人だったと思い出しながら、新年を少しは賑(にぎ)やかに過ごせることになったことを喜んでいた。

「シンタロウ、今日は、最高級の蜂蜜を持っていくよ。買っ

てくれると有り難いんだけど。まあ、見てくれ」

慎太郎はスルタンが蜂蜜商人ではないと思っていたので、そう聞いて不思議に思ったがとにかく見せてもらうことにした。

蜂蜜を持って訪ねてきたスルタンをまじまじと見たが、慎太郎にはやはりスルタンがオスマの疑っていたようなテロの黒幕・危険人物とはとても見えなかった。その後、ラミアと会うこともなかった。本気で慎太郎をテロリストとして細胞化したいのなら、もっとアプローチがあっべきだったろう。

スルタンは、四角い透明なガラスの瓶に入った蜂蜜を二つ持って来た。それぞれ一キロ入りで、一つはイエメン産でもう一つはアブ八産とのことだった。スルタンは、これはロイヤルファミリー御用の特別のもので、めったに手に入らないものだと言っていた。特にアブ八産のものは、特別ブランドでこれが最後のものだと言って自慢していた。ロイヤルファミリーを始めとする大金持ちにはこのような蜂蜜が人気

に入りの嗜好(しこう)品のようだった。ロイヤルファミリーは、アブ八産を三五〇〇リヤル(二〇万五〇〇〇円)で、イエメン産を二〇〇〇リヤル(六万円)で買ってくれと言っていた。慎太郎はそんなお金はないだろうから特別にそれぞれ一〇〇〇リヤル(三万円)、七〇〇リヤル(二万一〇〇〇円)にしておくとのことだった。

慎太郎は、それぞれを開けて味見をさせてもらったが、味はそれぞれ全く異なっていた。慎太郎は蜂蜜のことを良く知らなかったので、その品質を評価することなど出来なかったが、両方ともこれまで味わったこともない美味しさだった。それぞれ異なった香りがした。スルタンによれば蜂の種類も蜂が止まる花も異なるためだという。

花が違えば香りが違う。慎太郎は、今更ながら自然の営みの不思議さ、その恵みを感じていた。

見かけも両者は色、艶、粘度、全て異なっていた。イエメン産はどろどろとしてまるで水飴(あめ)のようだったが、アブ八産はさらさらとしていた。色はアブ八産の方がより黒に近かった。

最後に、スルタンは瓶を逆さまにしてその底を、目を皿のようにして調べていた。蜂蜜の品質を確かめるにはこのようにする必要がありらしい。偽者はこのようにすると下に砂糖が溜まっているのがわかるとのことだった。

慎太郎はスルタンから教わるが多かった。

スルタンは、蜂蜜は健康にも良いと力説した。毎朝、スプーン一杯舐(な)めると元気湧刺(は)つらつ(つ)としてくるなどとも言っていた。スルタンからは駱駝のミルクの効用も教わっていたから、毎朝、駱駝のミルクを飲み蜂蜜を舐めれば健康の上無(な)いことになる。

慎太郎がスルタンにそう言(い)うと、それは最高の贅沢(ぜい)たく(た)くだと笑(わ)って応(こ)えていた。

値引(ぢ)きをしてもまだ高いとは思(おも)ったが、慎太郎はこの二つの瓶(びん)を両親(りやうしん)の土産(みやげ)として買(か)うことにした。アブ八産(はちさん)の蜂蜜(はちみつ)の瓶(びん)には原産地(げんさんち)や養蜂家名(やうほうか)がアラビア語(あらびあご)で記(し)かれていて土産(みやげ)には最適(さいてき)だった。

スルタンはロイヤルファミリーに蜂蜜(はちみつ)だけではなく香木(かうぼく)なども用立(もち)ていてのことだった。

蜂蜜の話が終わったところで、慎太郎はスルタンのために香木を焚くことにした。

香炉を出して香木を焚き始めると、スルタンは大層喜んだ。頭に付けたシマーグを香炉に被せ煙を顔一杯に受けたりその立派な髭に念入りに染み込ませたりしていた。

そこで、慎太郎は恐る恐るオスマに聞いた話を出してみた。「スルタン、スルタンは、アブハであるアルナミを更生させただって」

スルタンの顔色が変わった。

「シントロウ、どうしてそれを知っているんだい……」、「彼は米国で九一一事件を引き起こしてしまったのだから、あまりその話をしたくはないんだが……、そう……、その通りさ。私がアルミナを更生させた。彼は大変優秀で音楽の才能もあった。ところがちょっとぐれちゃってね。欧米の音楽に気触(かぶ)れて、ギター片手にコンサートを開いたりして周囲の輦蹙を買っていた。それを、私が説得してイスラムの道に戻らせたんだ。敬虔なモスレムになってくれてね。

美しい声をしてきたからモスクでアザーン(礼拝の呼びかけ)をしてもらった。これが素晴らしいと評判になった。アルナミモアザーンやコーランの読誦(どくしょう)は欧米の音楽より気高く優れていると言っただけになった」

「私は彼のこのような変化を喜んでいた。彼の母親も大変喜んでくれてわざわざ私の家までお礼に来てくれたほどだった。ところが、いつしかアルミナはイスラム過激思想に染まってしまった。突然、私の手の届かない遠いところに行ってしまったのだ。悲しかった。残念でしかたが無かった」

スルタンの目にはうっすらと涙が光っていた。

「それも私の不徳の致すところだ」

慎太郎は、オスマの言っていたことを確かめたかっただけだった。しかし、米国で死んだアルミナを救えなかったことがスルタンの心に深い傷跡を残していたことが分かった。

「スルタン、そんなに自分を責めてはいけないよ。一度は、オスマはスルタンの教えに従って敬虔なモスレムになったのだから、スルタンには徳があったということではないのかな」

「有り難う。シンタロウ。一生懸命にアザーンを唱えていたアルミナの姿を今でもはつきりと思い出す。あの頃は本当に生き生きとしていた。心底からアラーを信じイスラムの規範に完全に従っていた。蔭に隠れてハッシッシ(大麻)を吸い墮落してポップスを歌っていたのが嘘のようだった」

慎太郎は、また香炉に香木を入れた。すると、スルタンはその煙を嬉しそうに手で掬い白いトープに染み込ませた。

「アルミナのイスラム理解は進んだ。どんどんと私から知識を吸収していった。そんなある時、彼はモスクで過激なウラマーと知り合った。若い純真な彼の心はそのウラマーの主張する思想に直ぐに染まって行った。アルミナとは随分議論をしたが、彼は次第に私を避けるようになって行った」

スルタンは寂しそうな眼差しをした。慎太郎は、黙って聞いている他なかった。

スルタンによれば、その当時のアブハはこのウラマーのよ
うな考え方が主流だった。スルタンのような穏健な考え方は

本来のイスラムの考えにより近いと言えたが説得力に欠けた。アルミナはスルタンの考えを十分に理解していた。アルミナはスルタンを心から尊敬していた。シェイクの位にありながら清廉にして高潔なスルタンの生活態度はアルミナだけではなく周囲のものからも尊敬を集めていた。その隣人愛は自然に滲(し)み出てくるものだった。純真なアルミナは本気になって彼を更生しようとしているスルタンの気持ちを正確に嗅ぎ分けていた。アルミナも、イスラムの教え通り平和を愛し戦争を憎んでいた。しかし、ウラマーのジハド(聖戦)を訴える声にはその心は敵わなかった。ウラマーは、米国の湾岸駐留は一種の侵略でありイスラエルを支援していること自体ジハドの対象であると主張した。そして、パレスチナの窮状、米英のアフガン、イラク攻撃を目のあたりにしてアルミナの心は定まった。スルタンがいくら説得しても、それを変えることは出来なかった。こうしてスルタンとアルミナはイスラムで心を一にしなから離れざるを得なかったのだ。

「その後、アルミナは外国に行くと言つので、及ばずながら

資金援助をしてあげた」

慎太郎は、オスマの言っていたことを本人の口からようやく確かめることが出来た。確かにスルタンはアルミナを更生させた。しかし、スルタンがテロリストの黒幕と言うのは誤解のようだった。ラミアがスルタンの関係する会社に入ったのは偶然のことだったのだろう。

慎太郎は、今度は、香炉にハッサンのマーモールを焚いた。

「慎太郎、このマーモールは素晴らしい香りがするね。プリンスの家で使っているのと同じものようだ」

スルタンは、その煙を盛んに鼻の方に手繰り寄せていた。

「スルタンは流石だね。これは、アブドルアジズ大王が好んで焚いたもので、今でもロイヤルファミリーが使っていると聞いている」

「そうか、やはりそうか。これは良い」

スルタンは悦に入っていた。

これでスルタンの気持ちは切り替わった。

続けて、スルタンはこの四ヶ月間でアブドルアジズの強い恨みを買ってしまったことを慎太郎に打ち明けた。

スルタンは、以前に慎太郎に話していた通りハイル家の有カプリンスにサード皇太子の国王昇格を支持するよう働きかけていた。それ自体、父トルキ航空国防相を擁立しようとして動いていたアブドルアジズの反感を買ったことだった。

スルタンは最終的にアブドルアジズを抑えることに成功するのだが、その切札として使ったのが内々に入手したアブドルアジズが反イスラム的行為である先物取引を行っているという情報だった。スルタンは言う通りにしなければ、反イスラム的行為を明らかにすると迫ったのだ。アブドルアジズは動きを止めざるを得なかった。何でも自分の思うとおりになってきたアブドルアジズにとってこれは耐えられないことであり、その恨みは極まった。

アブドルアジズはスルタンからその情報源をしつこく聞き出そうとしたらしいが、当然のことながらスルタンは決してそれを明かさなかった。アブドルアジズはスルタンに対し

アブドルアジズが先物取引を行っていることを決して他言しないように迫った。その代わりアブドルアジズがサード皇太子の即位に反対しないこと、スルタンを米国にある最先端のバイオ研究センターに留学させることの二つを約束した。

慎太郎は、ようやく、イブラヒムの部屋でスルタンの名前を出した時にアブドルアジズの顔色が変わった理由がわかった。

アブドルアジズは、その後もしつこくスルタンの行動を監視し、留学の約束もなかなか実現させなかった。

そして、わざわざ一月には先物取引に失敗したインド人を処分したことをスルタンに告げてきた。あたかも彼がスルタンの情報源だったことを匂わすような口ぶりだったとのことだった。

慎太郎は、そのインド人がイブラヒムのことを指していることは直ぐにわかった。やはりイブラヒムの麻薬取引が冤罪(えんざい)だった可能性が高い。

それ以降スルタンも身の危険を感じるようになったとのことだった。スルタンがサード新国王のお気に入りでなかったならばとつくに牢獄に入れられるか抹殺されていたに違いない。

もしスルタンがそのような危うい状況にあるとすれば慎太郎も安全とは言えない。そして、スルタンの身に何かが起ければプロジェクトKのことは南に任せてリヤドを離れた方が良いかもしれないと考え始めた。念のため慎太郎はスルタンに日本から持って来ていた私用の携帯電話番号も教えておいた。

今年のハッジでは悲惨な事故が起きてしまった。一月一日午後一時過ぎ、悪魔への石投げを行おうと巡礼がジャムラット橋に集まった時に巡礼達が交錯し混乱が起きた。大勢の人が集まっているので、ちょっとしたことが大きな混乱に繋がった。あっという間にパニックとなり押し合い圧し合いと

なつてばたばたと人が倒れ折り重なってしまった。その結果、老人を中心に三四五人が死亡し一〇〇〇人以上が負傷した。

スルタンは、早速慎太郎の教えた私用携帯電話番号に電話を掛けて来た。そして、慎太郎にこの事故の詳細を説明して深く心を痛めていると今にも消え入りそうな声で切々と語った。敬虔で心優しいスルタンが聖地での悲惨な事故にかなり心を痛め滅入ってしまったことは慎太郎にも充分にわかった。

しかし、そのあまりにも落胆したスルタンの様子には腑に落ちないところがあった。慎太郎はスルタンが何か悩みでも抱えているのではないかと思っただが、スルタンは相変わらずこのハッジの事故のことを延々と喋り続けていた。慎太郎はその落胆振りには権力中枢にいるアブドルアジズとの角逐にスルタンが疲れ果ててしまったことも影響しているのではないかなどと想像し心配していた。

適当なところで慎太郎は口を挟んだ。

「ところで、スルタン。何だか随分と元気が無いね。何かあったの」

「わかるかい」

「それはわかるよ」

「実は、この間紹介した弟のカリムと大喧嘩をしてね」

スルタンの元気が無かったのは、アブドルアジズとの角逐のせいでは無かった。

「日本では兄弟喧嘩は犬も食わないと言ってね、兄弟は直ぐに仲直りをするから他人が仲介に入らない方が良いと考えているんだ。うーん、まてよ、これは夫婦喧嘩のことだったかな」

慎太郎は、わざと間違えてなんとかスルタンの心を和ませようとした。しかし、スルタンの声は相変わらず沈んでいた。スルタンの兄弟喧嘩は相当深刻なものようだった。

「それに、日本では、“兄弟は両の手”と言って、仲良くしなければいけないと言われている」

慎太郎は、懸命にスルタンを元気付けていた。

「シンタロウ、有り難う」

スルタンの声には全く力がなかった。

「シントロウの前にアルミナのことを話したけど、カリムはアルミナと同じ道を辿(たど)ろうとしているんだ。いやアルミナより過激かも知れない」

「えっ、カリムがテロリストになったとでも言うのかい」

慎太郎は、あの腺病質気味のカリムの顔を思い浮かべていた。

「慎太郎、ちょっと待ってくれ。慎太郎は簡単にテロリストというけど、実は我が国にはテロリストなどいない。アルミナも決してテロリストではない」

「……………」

「欧米人は、テロリストと彼らを呼ぶかもしれない。しかし、彼らは自分達を神に命を捧げてジハドを戦った戦士、英雄だと思っっている。私は彼等と主義が違(ちが)うから彼等を英雄までとは呼ばない。しかし英雄と呼んでいるものも多数いる。特にアブハにはそのようなものが多い。カリムもそう考えている。本当に困っている」

「スルタン、ご免」

「いや、いいんだ。シンタロウの表現の方が普通だと言うことはわかっている。ただ、そんな考え方のものもいるということをおきただけだ。特に、カリムがその方向にある今はそうこだわりたくなってしまっ」

慎太郎には、スルタンの声が少し元気になったような気がした。

カリムが沙漠のサソリの一員になってしまっているとしたら、今後スルタンには近寄らない方が良いのかもしれない。あるいは、オサマの言う通りスルタンはテロリストの黒幕かもしれない。黒幕では無いとしてもそれに近い存在なのかもしれない。そうであれば尚更だ。

しかし、慎太郎にはスルタンを放って置くことは出来なかった。

「スルタン、これから、マールモールとマップスースを持って、そちらに行って良いかい」

慎太郎は、ほとんど反射的にそう言っていた。

「有り難う、慎太郎、それは楽しみだ。是非来てくれ。蜂蜜

と美味しいアラビアンコーヒーを用意しておくから」

慎太郎は、早速、オスマに連絡をしてスルタンの家まで行ってもらうことにした。

「アツサーラーム、アレイコム」

「アレイコム、サラーム」

慎太郎は、スルタンといつものようにアラブ式の挨拶をした。慎太郎がマーモール、マップスースをスルタンにわたすとスルタンは満面の笑みを浮かべた。

よほど好きなんだろう。早速、香炉でマーモールを焚き始めた。そして、ゆらゆらと立ち上る煙の中で気持良さそうにしていた。

「慎太郎、有難う。本当にこのマーモールの香りは素晴らしい。嫌なこと全てを忘れさせてくれる」

スルタンは電話の時より元気そうに見えた。スルタンは台所に行ってポットに入ったアラビアンコーヒーと小さなコーヒーカップを持って来た。二人は静かにマーモールの芳香に包まれながらアラビアンコーヒーを啜った。

すると、いきなり二人のいるリビングのドアが激しく開け放たれて機関銃を持った男が二人、どかどかと中に入ってきた。

一人はカリムだった。銃口は慎太郎に向けられていた。

慎太郎はしまったと思った。

スルタンを信用してやってきたのが間違이었다か。カリムの目はまるで獲物を狙う豹のように爛々と輝いていた。カリムは随分逞(たくま)しくなっていた。

「デビル(悪魔)・ブッシュの手先、日本人、観念しろ」

カリムは叫んだ。慎太郎は即座に携帯を取り出しオスマに連絡をとろうとした。

その時スルタンがカリムを制した。

「カリム、私の客人に何をする」

スルタンはカリムの機関銃の銃口を手で抑えた。

「日本政府は米政府を助けイラクに派兵している。明らかにジハドの対象だ。この日本人を捕らえてサウジ政府に同士の釈放を要求するのだ」

カリムはスルタンの手を払うため銃を動かそうとしたが、スルタンの力は強く全く動かなかった。

「シントロウは、私がお前のことを話したら、おまえのことを心配して直ぐに飛んで来てくれたんだ。そんな優しい純真な心を持った人をおまえは捕まえようと言うのか。どうしても捕まえるというならばたった今おまえとは兄弟の縁を切る。まず私を殺してからにしてくれ」

「……………」

カリムはしばし押し黙っていた。そして、機関銃の手を緩めた。スルタンも銃口からその手を離した。

「そうか、彼は全てを承知の上でやって来たのか。今回はその気持ちに免じて見逃すが次からは誰の説得も受けない」

カリムは仲間を制しそこを去った。

「シントロウ、ご免。カリムが帰ったら三人で話そうと思っていたが、こんなことになってしまった。済まない。カリムとの話し合いは無駄なようだ」

慎太郎の額には極度の緊張で冷や汗が滲み出していた。

慎太郎は自分の無鉄砲さを今更ながら嫌という程思い知らされた。しかし、慎太郎にそのような無鉄砲さが無かったならば決してイスラム、サウジそしてスルタンを深く知ることは出来なかったことだろう。

「スルタン、有り難う。スルトンの御蔭で助かった。銃口を向けられた時には体が震えた。もう、これで最後かと思ったよ」

今は、スルトンの友情を改めて噛み締めていた。

スルトンの目には涙が溢れていた。しかし、人々の尊敬を集めるシェイクらしく取り乱したところは一切無かった。じつと深い悲しみを堪(こら)え静かに嗚咽(おえつ)していた。

「シンタロウ、私は悲しい。自分の無力さをこれほど味わったことは無い。アルミナの時もひどい無力感、空しさを感じたけど今度は血の繋がった弟だ」

「スルタン、力を落とさないように。カリムもきつといつかスルトンの気持ちをはわかってくれると思う。若気の過ちと反省する時がきつと来る」

「シンタロウ、有り難う。私もそう望みたい」

慎太郎とスルタンは暫らく無言のままだった。

「シントロウ、アラビアンコーヒーをもう一杯どうだ」

ようやくスルタンの顔には笑みが戻っていた。

「有り難う、スルタン。もらうよ」

二人はやるせない気持ちでアラビアンコーヒーを啜った。

アブドルアジズ大王の好んだマーモールの煙が二人の周りを優しく包み、傷付いた二人の心を癒すようにその優美な甘い芳香を部屋一杯に漂よわせていた。

カリムとマスードは寒風吹きすさぶガーミッド族の村を歩いていた。二人ともアルコバルからやってきたので寒さが身に沁みてはいたが、熱砂の沙漠で育ったマスードには特に身に応えた。

「統領、本当に寒いですね。ここはこれでもサウジなんですよ。あゝ風が身に沁みます。信じられない寒さです」

「マスード、済まん。もう少しの辛抱だ。あそこに灯りが見えてきた。あの家だ」

カリムはアブカイクに対するテロ攻撃を実行する前にフアリファに一度会っておきたかったのだ。そんな素振りは一切見せなかったが、カリムは今回の作戦で殉死するつもりだった。

カリムの脳裏には、フアリファの姿が焼き付いて離れなかった。その姿は、まるで天使のように神々しく、その円らかな瞳はキラキラと輝いていた。

昨日のアルコバルでの宴席でもそうだった。

「統領、統領はどの娘がお気に入りですか。どの娘もあのように統領に媚を売っておりますよ。選り取りみどりでお楽しみ下さい」

脇に座ったナセルの言葉が聞こえた。大分大麻に酔っていたので呂律が回らなかったが、そうカリムに熱心に勧めていた。リーダーのナセルは薬も好きだったが絶倫で女も好きだった。四人の妻では飽き足らず、それ以上に女を囲っていた。今日は今日でまた別の女を横に侍らせ、宴会が終わったら奥の部屋にしけこむつもりだった。

統領のカリムは、いつもそんなナセルを笑って見ていた。

決して咎めることはなかった。特に、今回は決死の作戦の前だ。無礼講だった。

皆、輪になってそれぞれがお気に入りの娘を脇に侍らせていた。二人で大麻を吸って、我を忘れて絡み合っているものもいる。中には男性同士で絡み合っているものもいる。嬌声、笑い声、そして時には罵声が響いた。

「ここはまるで天国のようです。最高に楽しいです。統領、有難うございます」

などと言ってカリムのところにお礼にやってくるものもいた。感極まって泣くものもいた。そんな彼等にカリムは、いつも一人一人丁寧に静かに応えていた。

カリムから行かなくともにじり寄ってくる娘が何人かいた。そんな彼女等を特に拒むこともなく抱いてあげていた。大麻を吸って息を荒げている娘も来たが、カリムは大麻を吸わなかったのでそんな娘達はそれとなく遠ざけた。良くしたもので直ぐに他の男がそれをカバーした。

娘達にはいつも自然体で接していた。時には、気に入った娘と奥の部屋に一緒に行くようなこともあったが、昂ぶった

感情から醒めると決まって空しさを感じていた。

カリムは知らず知らずの内にその娘の中にファリファの影を追い求めていたのだ。この日もそうだった。

カリムは求められるままに何度か娘の要求に応え、その要求を満たしてあげた。カリムの若い肉体に絶叫して我を忘れてしがみついてきた娘も今は精魂尽きて横たわっている。

カリムはその娘を残したままそっとベッドを抜け出すと外に出た。夜空には二日月が出ていたが、カリムにはその直ぐ脇にファリファの笑顔が浮かんだ。

カリム様。私の顔に何かついていませんか？

ファリファはそうカリムに尋ね軽く首を傾げた。

カリムは最初に会った時のこの光景を思い出す度に切なく胸が張り裂けそうになる。

カリムはアルミナの家の扉を叩いた。すると直ぐに扉が開いてそこにはファリファの姿があった。

「アッサラーム・アレイコム」

そう挨拶をしたファリファの美しさに見惚れながらカリムは応えた。

「アレイコム・サラーム」

カリムが従者のマスードをファリファに紹介すると、ファリファはマスードに自分の名前を言って同じ挨拶をした。マスードも応えた。

「シェイク・カリム様、お待ち申し上げておりました。本日は、寒いところ、このような遠いところにお越し頂きました。本当に有難うございました。今日は殊の外寒いですから、早速、中にお入りになり暖をお取り下さい」

ファリファは二人を中に入れると暖炉へと案内した。

「有難うございます。それでは遠慮なく入らせて頂きます」

カリムとマスードはアルミナの家に入った。

体を小刻みに震わせていたマスードは寒さも限界だったのか、急いで暖炉の前に行くと思ひ込んだ。

その姿が余程おかしかったのか、ファリファはカリムの方を振り向いて手で口を覆いながらクスクスと笑った。

そのあどけない純真無垢の笑顔が、またカリムの脳裏に深く刻み込まれた。

ファリファ、私は貴方のその笑顔を胸に最後の作戦に挑ませて貰います

「シェイク・カリム様、いつまでも息子のことをお忘れ無くこのようなあばら家にお越し頂き、光栄でございます」

アルミナの母は、今日は正常だった。痴呆症のような時とそうでない時が交互に訪れるようだった。カリムはファリファの日常はその対応で困難なことだろうと一層哀れに思った。ファリファを助けたとは思ってもカリムの出来ることには限界があったし、ファリファがアルミナ同様そのような助けを歓迎しないことは明確だった。

貧しい中でも人のことばかりを考えているそう言った家族だった。その生活振りは清貧と言う言葉に最も近いと思われた。そこで、カリムはレッド・クレセント(赤半月旗社・日本の赤十字社にあたる)を通じて人知れずアルミナの遺族

を助けることにしたのだった。

お茶を飲みながらの会話が続いた後、ファリファが切り出した。

「実はお陰様にてあれから我が家にも有り難いことが起きました」

「それは良かったですね。一体、どうしたのですか？」

カリムはレッド・クレセントのことだろうとは思っていたが、そう言ってみた。

「娘はまだ小学校入学前と幼かったのですが、レッド・クレセントさんのお陰でロンドンにあるイスラム系の寄宿舎に留学させることが出来たのです」

やはりそうだった。

「ほう、それは良かったです。運が向いてきましたね」

カリムは、アルバハのレッド・クレセントに知人がいたので、彼に頼んでファリファには気づかれないうちに留学を勧めるよう依頼していたのだ。

「まるで夢のようなお話なのです。たまたま、娘がお世話になっていたレッド・クレセントの保育所の保母さんから“お宅の娘さんは優秀なお子さんなので資金協力をしたいという方”がお出になりましたので、ご検討願いますかという申し出があったのです。いろいろとお伺いしたところ、サウジではあまり一般的ではありませんがスイスなどでは全寮制の幼稚舎もあるようなこともお聞きしたりしたものですから、母と相談して思い切ってお願ひすることにしたのです。幼い子を旅に出すのは忍びないのですが、娘の将来のためにはそれが一番と判断したのです。それに、恥ずかしいことですが家にいたのでは、満足に教育を受けさせることも出来なかったことでしょう」

「それは良かった。きっと娘さんは皆さんの期待に応えてくれることでしょう」

「親の私が申し上げるのもおかしいですが、あの娘は本当に賢いまるで大人のように聞き分けの良い子で最初は躊躇していました。が直ぐに受け入れてくれました。手の掛からない子で助かります。そして、さかんに親切な方のご好意に感謝

しておりました。寄宿舎からお礼の手紙を書きたいなどと申しておりました」

カリムはどれだけそれは自分だと言いたかったことか、そうでなくとも、生き長らえて、あの足長おじさんのように彼女の手紙をどんなに読みたかったことか。

自分はもうすぐ居なくなる身だ、せめて彼女に役立てたことで満足しようと気を切り換えていた。

「レッド・クレセントは、絶対にそのお方のお名前は教えてくれません。母と私は、今はその方のお名前を知ることが諦めています。でも、ご恩は一生忘れません」

そう言ってファリファはカリムの顔を覗き込んだ。

カリムにはまるで貴方ではありませんかと聞いているように見えてその目をまともに見ることが出来なかった。

「何でも、そのお方は娘が望み、また成績さえ良ければ、大学まで面倒を見ても良いと仰っていたとのことでした。相当なお金持ちであるに違いありません。あるいはロイヤルファミリーのどなたかなんでしょうか」

ファリファは今一度カリムの目を覗き込んだ。その円らな

瞳は美しく輝いていた。カリムはそっと目をそらした。

「ファリファさんもお母さんも良く思い切られましたね。ご心配でしょうが娘さんの成長が楽しみでもありますね」

カリムは、自分の気持ちが読み取られないようにするのに一生懸命だった。

カリムは、お茶を飲み終わった後、またアルミナ家の料理をご馳走になった。満足だった。

「ファリファさん、私は、娘さんの話、それにお二人の元気な姿を見て安心しました。どうか、いつまでもお元気で頑張ってください。これは僅かですが、今日のお礼として取っておいてください。レッド・クレセントのようには行きませんが……」

そう言って、両腕に嵌めて来た金のブレスレットを外して手渡した。それはずしりと重く幅広い、ファリファがこれまで手にしたことのないほど高価なものだった。

「こんな貴重なものを頂戴するわけには参りません」

「そう仰るものと思っていました。それでは、差し上げませ

ん。しばらくお預かり願えないでしょうか。大事にとっておいて頂ければそれで良いのです。私はこれからイラクへ参ります。無事帰って来るまでお預かり願いたいです」

そう言つとカリムはファリファの顔をじっと見詰めながら、返そうとするファリファの手を押し返し、手をそつと添えるとファリファの手に金の腕輪を握り直させた。

「えっ、イラクへ行かれるのですか？」

ファリファは訊いた。

「そうです。少数派になったスンニ派の人々を支援するためです。きっと戻ってきますので是非お預かり願いたいと思います」

カリムはファリファに懇願した。

カリムは嘘を言っていた。

もう二度とこの家に戻るなどない。愛しいファリファのために出来ることを全てしておきたかったのだ。

ファリファはカリムの目の奥にアルミナがこの家を出て行った時と同じ影を見たような気がした。

カリムは、前にアルミナの家を後にした時と同じように何
度も何度もアルミナの家を振り返っていた。

アルミナの母とファリファも前の時と同じように寒い中
いつまでも玄関のドアの前に立ってカリムとマスードの二
人を見送っていた。

二人はアルミナの母とファリファに深々と頭を下げ、最後
の別れを告げるため大きく手を振った。ファリファとアルミ
ナの母もまた手を振った。

カリムの目からは止めどなく涙が流れていた。

カリムは、前にも増して重い気持ちでそのドアが視野から
消える曲がり角を曲がった。

前と同じように、きつと、そこにはまだ二人の姿があるに
違いないと思っただけだったが、今度は、カリムは、意を決して
その角までは戻らなかった。

カリムは、アルミナがジハード(聖戦)に立ち上がった時、二
度と戻ることはないあの家を、こんな気持ちで後にしたに違
いないとアルミナの気持ちを推し量っていた。

自分は、自分の財産を投じてファリファ達を守ることが出来た。それだけで幸せだと思っていた。

そして、愛しい人に全てを捧げることが出来た、これだと思
い残すことはないと自分に言い聞かせていた。

今や、カリムの意識は沙漠のサソリの統領に戻り、その頭
の中はアブカイク攻撃のことで一杯だった。